

より高い山へと誘われて

私の最初の職場は三鷹市の東京大学東京天文台（現：国立天文台、標高 57m）の測光部でした。ここでは夜天光の観測がおもな仕事でした。この仕事はその後の東京天文台・木曾観測所（現：天文学教育研究センター）の観測へと移って行きました。木曾観測所は長野県の西南部に位置し、北西に木曾の象徴でもある木曾御嶽山を控え見晴らしの良い高台（標高 1,130m）にあります。開所当初は写真乾板を用いて天体を撮影していましたが、感度が低いため乾板の超増感の実験をくりかえし、少しでも効率の良い観測ができるようにすることが私のおもな仕事でした。その後は望遠鏡の制御系の開発に携わりました。ソフトウェアを駆使し、大型望遠鏡を自由に操る醍醐味は格別なものでした。1996年に吉井先生に進められ、米国ハワイ州マウイ島のハレアカラ山（標高：3,055m）に口径 2m のマグナム望遠鏡を建設する計画に参加させていただきました。モニター観測専用のロボット望遠鏡を海外に立ち上げることはこれまでに例がなく、生涯忘れがたくかつ貴重な経験をさせていただくことができました。通算すると 1 年以上もマウイ島に住んでいたことになります。この 12 年間の経験は私の大きな自信にも

なりました。現在、南米チリのアタカマ砂漠にある TAO 望遠鏡山麓基地でこの原稿を書いています。TAO 望遠鏡は口径 6.5m の赤外線望遠鏡でチャナントール山（標高 5,640m）に建設するための道路工事が着々と進められています。こうして私のこれまでの足跡を辿ってをみますと、「より高い山へと誘われて」来たのだといえるように思います。

いっぽう、自分の足元にある木曾観測所では、新たな観測装置（Tomo-e Gozen）の開発が進められています。これは世界に類のない動画カメラとなります。また、地元自治体と連携して、星空を地域の資源ととらえた取り組みも進めています。今後はこれらの取り組みに微力ながらお役に立てればと思っています。稿を閉じるにあたり、職場の同僚をはじめ、さまざまな形でご指導・ご協力いただいた皆様方に心から感謝申し上げます、退職のご挨拶と致します。一個人として、悔いのない仕事をしてこられた原動力は、美味しいお酒と素晴らしい仲間のお陰ではなかったかと思っています。木曾では七笑、ハワイではパド、そしてチリではピスコサワーなどであったでしょう。長い間本当に有難うございました。



青木 勉
(天文学教育研究センター 助手)

青木副所長の退職に寄せて

小林 尚人 (木曾観測所 所長
／天文学教育研究センター 准教授)

青木さんは 1972 年に東京大学東京天文台（現、国立天文台）測光部に技術職員として着任された後、1974 年に創立されたばかりの木曾観測所に赴任されました。その後、ご退職の今年まで 45 年勤務され、文字通り観測所とともに歩まれてきました。途中 1988 年に東京天文台が全国共同利用機関である国立天文台に転換される際に、木曾観測所は天文学教育研究センターの施設として東大に残りました。その中で青木さんは、1992 年からは助手を勤められ、2016 年からは木曾観測所の副所長として活躍されてきました。

ご在職中は望遠鏡・観測装置の立ち上げおよび運用のすべての側面、技術職のリーダーとして活躍されてきましたが、とくにソフトウェア開発では専門的に貢献されました。最近では長野県との

協議会など、さまざまな地元・社会貢献でも中心的に活躍されています。

青木さんは望遠鏡が正常に稼働することを常に最優先に、着実かつ誠実に業務をこなされてきましたが、それが木曾観測所を長きに亘って支えてきたと言っても過言ではありません。生粋の木曾生まれ・木曾育ちの青木さんは、初対面の方にも気さくに話しかけられるお人柄から、ひじょうに多くのご友人を地元周辺だけでなく大学・天文関係全体にもお持ちで、それを通じて観測所が助けられてきたことも多々あります。青木さんには、今後ともぜひ若い後継者をご指導いただく形でご協力いただければと願っておりますが、ひとまずは長い間たいへんおつかれさまでした。

非平衡系の法則を求めて



佐野 雅己
(物理学専攻教授)

私の研究分野を複雑系と呼ぶ人もいるが、日本では複雑系と言う言葉があまり良い印象を与えないためか、あえて非線形非平衡系の物理学といかめしい分野名でよぶことが多い。考えてみればおかしな分野名である。非が2つもつくのは、あまりに否定的、後向きの印象さえ受ける。しかし、その意味は、線形や平衡の系はもう分かったので、その外側の領域で新しい学問を創ろうという意気込みを表したものだだろう。そのような意気込みのもと、1970年代から90年代初頭にかけて、ソリトン、カオス、フラクタルなどの新しい概念が世界的に生まれ、流行した。それが一段落した頃に、18年半、教員として過ごした東北大から、東大に呼ばれて移ってきた。これは、世間の評価はいつも遅れてやってくるためだと勝手に解釈している。素粒子と宇宙物理学の拠点と言う印象が強い東大物理になぜ私が、と思った時期もあったが、よくよく考えてみればここは、過去には寺田寅彦やロゲルギスト達を生んだ、日本の一般物理学の発祥の地でもあった。周りとは一味違うことをやれということかと思ひ、在任中は様々のテーマに取り組んだ。前任の附置研究所は工学分野の研究所であったためか、学生への説明会で「それが何の役に立つんですか」と聞かれ戸惑うことも

あったが、理学部に来てからはその類の質問は一度も経験することなく、思う存分研究が楽しめたと思っている。幸い、素晴らしく優秀な学生さんが毎年来てくれて、研究室は大いに盛り上がった。ありふれた現象の中の小さな発見と呼べるものから、将来大きく発展しそうな普遍法則に関するものまで、学生達と発見の喜びを分かち合えたのは貴重な体験だった。非平衡状態では様々の不安定性が起こる。それは一般に対称性の破れを伴い、時空間の秩序構造や乱れを自発的に生み出す。殆ど無限種類の不安定性がありそうだが、実はそれらは分類でき、共通の式で書ける。また、大自由度になると平衡系の臨界現象のような普遍的な性質が現れることがある。自然界で、独りでに形ができたり、乱れたりする現象(自己組織化現象)は、その意味で統一的に記述できるため、物理現象に限らず、生物集団や細胞集団のような一見複雑な系にも適用できるところが面白い。だが、これらも豊かな自然現象のほんの一端にすぎず、知らないことや、知りたいことはいくらでもある。幸いこの分野は小規模、少人数でもできるので、今後も可能な限り研究を続けたい。そして今度は、外の世界にも新風を吹かせたいと考えている。

佐野牧場に乾杯

樋口 秀男 (物理学専攻教授)

佐野研究室では、スタッフや学生一人一人が自由な研究を行っている。そのため研究の範囲は広く、実験(流体、液晶、細胞、生体分子)、理論物理(統計、カオス、乱流、情報)などで、多くは非平衡物理学の範疇に入る。この自由な佐野研を例えるならば牧場だ。牧場は非平衡系の柵で囲まれ、その中で学生は自分の興味を見つけ、すくすく育てゆく。やがて学生は、柵を飛び越えて新天地を開拓する。そして今では、佐野研と出身者が日本の非平衡物理学の大きな柱となった。

佐野さんは、学問の広さに加えて、組織をつくる能力がある。新学術領域の代表者として「揺らぎと構造の協奏」領域を立上げ、その翌年には、理学部に新しい機構を創るべく奔走した。でき上がったのは、生物普遍性研究機構(2016年)で、

数理論理と生物学の境界の新天地を創ることを目指す。新しい学問領域には、自由な発想がかかせない。佐野牧場のような自由な雰囲気では機構が活気に満ちたスタートを切った。

この自由な雰囲気はどこから生まれるのだろうか。夕方佐野研を覗くと、佐野さんは、学生に囲まれ酒をよく飲んでいる。私もその輪に入れてもらい、国内外の酒をいただき、議論に参加する。佐野さんは大の日本酒好きで、日本酒にはかなりうるさい。だから、酒はうまい。お酒は、心をリラックスさせ、佐野牧場の肥やしとなっているのだろう。これまで多くの学生を育てたこと、機構を立ち上げたことに感謝しつつ、佐野牧場に乾杯。

堆積リズムに魅せられて、定年なれど道半ば

私は、1974年に地質学科に進学して以来、45年間ずっと東大理学部でお世話になって来ました。何故か東大から出るチャンスを掴めぬまま定年を迎えます。学部時代にはとくに強くは研究者を志向していなかったのですが、大学院で野外地質調査を行ううちに、自然観察の面白さに次第に引き込まれていきました。自然現象を五感で感じて初めて気付く事、アイデアが湧き出る事を知ったからです。私の場合、とくに地層がリズムをもって累重して生み出す景観の神秘的な美しさに魅了され、それがどの様にしてできたのか知りたくなりました。そして、そうしたリズムが、地層の色や固さ、粒度などの物性や鉱物・化学組成の変化などを通じて、過去の環境変動を記録している事を知るにつれ、地層のリズムから過去の環境変動を復元する研究に興味をもつようになりました。

ちょうどその頃（1989年）、院生の頃に知り合ったアメリカ人の友人の誘いで、国際深海掘削計画の日本海掘削航海に参加する機会に恵まれました。掘削は日本海深部4地点で行われましたが、どの地点でも明灰色で有機物に乏しい層と黒灰色で有機物に富んだ層のくりかえしが海底から100m以上に渡って回収されました。しかも、明暗の縞

模様が、700km以上離れた地点間で見事に対比されたのです。これは、何らかの環境擾乱に対し、日本海が1つのシステムとして応答した事を意味しました。次に、その環境擾乱とは何なのかという疑問が湧いてきました。こうして、この明暗縞の研究が、私のライフワークになりました。その後20年近くかけて、この明暗縞が偏西風ジェットの南北振動に同調したモンスーン・フロントの南北振動が引き起こす日本海への栄養塩供給量変動を反映している事を学生達と共に明らかにしました。そして現在、偏西風の南北振動やモンスーン変動が、氷床の不安定性に起因する地球環境システムの自励振動である可能性を追求しています。

定年も近づいてきた2013年、私がリーダーとして統合国際深海掘削計画に申請していた日本海再掘削航海が実現し、元教え子や研究仲間などと共に日本海内7地点と東シナ海2地点で掘削を行いました。採取した試料の分析、解析研究は今も続いており、成果が出始めています。3月末に東大は退職しますが、研究の方はまだ道半ばです。会議や雑用から開放され、気の置けない仲間たちと楽しみながら研究を続けていこうと期待に胸膨らませています。



多田 隆治
(地球惑星科学専攻)

多田隆治先生を送る

田近 英一 (地球惑星科学専攻 教授)

多田先生は、日本海堆積物の堆積リズムの解析や酸化還元環境復元などに代表される古気候・古海洋学研究の第一人者として長年活躍されてこられました。これまで数多くの国際共同研究プロジェクトに関わってこれ、地球環境史学会長などを歴任されました。

私は、助手になりたての頃、多田先生が担当されていた学部の野外調査実習に何度か同行させていただき、堆積物の見方や地質調査のいろはを教えてくださいいただきました。地質調査では詳細な観察やスケッチを行いますが、それはただありのままを写し取ることではありません。自然の中から本質を見抜いて抽出する作業です。それはある種の「芸術」だと思っている、と多田先生はいわれました。その言葉がいまも心に残っています。

多田先生とは、恐竜絶滅の原因となった小惑星衝突で形成された巨大津波堆積物やスノーボールアース(全球凍結)のさいに形成された氷河堆積物などの研究で、何年にもわたりキューバやカナダ、アメリカなどで一緒に学術調査をさせていただきました。それはこの上なく楽しい経験であり、とてもよい思い出になっています。

多田先生は、これまで数多くの学生を育ててこられました。挫折に弱い学生を見事に立ち直らせる特技をお持ちの、たいへん熱心な教育者でもあります。

最近では中国やタイなどの調査を中心にお忙しくされていますが、それらのプロジェクトは退職後も続けられるとのこと。まだまだお元気で研究を楽しまれることを心から願っております。

理学系研究科を去るにあたって



福田 裕穂

(副学長・理事／生物科学専攻)

東京大学で博士号をいただき、再び教授として東京大学に戻ってきたのは1995年秋でした。最初に赴任したのは理学部附属の植物園。環境は抜群ですが、私自身の研究は細胞・分子レベルの研究。設備がまったくなく、前任地の東北大学から連れてきた学生と植物園の職員に手伝ってもらって木を切り、整地し、グロースチャンバーを設置するところから始まりました。そうそう、グロースチャンバーを動かすためには植物園の電気容量が足りず、工学部で不要になったトランスをもらってきて植物園のメインのものと取り替えることもしました。しかし、私の分類学の知識不足のために、1年半ほどで植物園を首になり、本郷の理学部2号館に研究室を移動しました。ここでも、新たにグロースチャンバーをつくりました。

しばらくは落ち着いて研究に専念できたのですが、2001年から総長補佐に指名され、佐々木総長のもとでの大学運営のお手伝いで忙しい毎日を送りました。この時は、国立大学法人化に向けての準備のまっただ中で、毎週この議論をしまし、東京大学憲章作成や情報公開の立ち上げなどにも、微力ですが、力を尽くしました。協働作業が多かったためか、この時総長補佐だった人たちとは、今でも一緒に仕事をしたりお酒を飲んだりしています。ただ、総長補佐が研究科長、副学長、理事へと繋がるトンネルの入口になってしまうと

は当時は知る由もありませんでした。

理学系研究科では、副研究科長や評議員、さらには研究科長をさせていただきました。そこでの強い印象は、研究科の先生たちの強いキャラと研究の素晴らしさでした。素粒子の話も、レーザーの話も、エルニーニョの話もわくわくしました。アタカマもとても良い思い出です。高地で頭がぼんやりしていたためか、財務上の心配事も忘れ、とても幸せな気分でワインを楽しめました。

振り返れば、研究の好きな人たちが集まった理学系研究科という場で、本当に楽しく研究をさせてもらいました。たいへん充実した研究生生活でした。もっとも、実際に実験したのはもちろん学生や若い研究者で、私は彼らに日々の糧を与えたり、背中を押したりする役割でしたが、それでも一緒に研究をすることは私にとって他に代えられない喜びでした。心残りは、研究室内会議で毎年要求していたにもかかわらず、ムダと言うことで最後まで私の実験用スペースを用意してもらえなかったことです。今後、科研費がある間は、もう少しだけ研究を続けるつもりでいます。これからもお世話になることがあるかもしれませんが、その節はよろしくお願いたします。最後に、私の研究・教育・運営を支えてくれた理学系研究科の教職員の皆さまに、心からの謝辞を述べて私の退職の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

福田裕穂先生のご退職に寄せて 伊藤（大橋）恭子 (生物科学専攻 准教授)

福田裕穂先生は、1982年に東京大学大学院理学系研究科で学位を取得され、大阪大学、東北大学を経て、1995年から当研究科の教授を務められています。長年、植物科学分野の研究を牽引され、日本植物学会長、日本植物生理学会長なども務められました。2012年には紫綬褒章を受章されています。また、当研究科長をはじめとした多くの役職を歴任され、現在は東京大学理事・副学長の重責も担われています。

福田先生は維管束研究のパイオニアとして終始世界をリードされてきました。福田先生は、大学院生時代に葉の細胞を維管束の細胞へと分化転換させるという驚くべき実験系を開発されました。その後、この実験系をひとつの強力なツールとして、維管束形成を司る分子機構、ひいては植物形

態形成の基本原理解に迫る研究を大きく展開されました。福田先生の開発された実験系は今でも学部の実習で体験することができ、これまでに私を含む多くの学生が植物細胞のもつ美しさと可塑性を明確に見せてくれるこの大胆な実験系に魅了されてきました。

福田先生は、専攻のソフトボール大会ではピッチャー兼バッターとしてマルチに活躍され、学生に「ふくちゃん」ファンをもち、真っ赤なトマトのトレードマークを教授室に飾られていることから分かるように、常にエネルギーに満ち溢れたたいへんフレンドリーな先生でした。

今後もお忙しい日々が続くことと思いますが、先生のご健康と益々のご活躍をお祈りしております。

30 + 10 + ..年を振り返って

先日、ある著名な海外の物性理論家が雑談中に「私が今の大学に職を得られたことは幸運以外の何物でもない」と言ったのを聞いて、その謙虚さに驚いた。しかし、改めて振り返って考え直してみると、30年間東大に奉職できた自分こそ幸運であり、謙虚さを忘れていた自分に恥じ入った。

私が物性物理学、なかでも強相関物質の分光研究を専門とするに至ったのは、大学院で光物性研究の指導を受けたことに始まるが、さらに遡ると、中学・高校の頃愛読（精読）していた写真雑誌の連載記事（新製品カメラの性能を徹底的に計測・評価する連載シリーズ）を作成していたのが、当時の物理学教室の小穴研究室であったことが原点であった。修士課程では、物理学教室に導入されたばかりの超伝導磁石を利用して磁気光学測定装置を作製し半導体の研究を行い、研究者としてスタートできた気分になった。

修士課程修了後つくばの無機材質研究所に入り、表面研究を目指して光電子分光の装置を立ち上げた頃、所属研究室が看板を遷移金属酸化物に掛け替えたことで、典型的な強相関物質である遷移金属酸化物と出会った。ニッケル、鉄などの酸化物を光電子分光で調べていた1986年、銅の酸化物で高温超伝導が発見されたことは大きな幸運だった。

つくばでの10年間の後に物理学教室に着任してからは、物理学教室や学内外の方々と多くの共同研究を開始でき、一気に世界が広がったように感じた。高温超伝導体ばかりでなく、多様な物性を示す遷移金属化合物の物質群に研究の幅を広げることができた。

東大着任10年後の1999年に、理学系研究科から新しく立ち上がった新領域創成科学研究科に移り、その後、研究室ごと柏キャンパスに移転した。すでに柏に移転していた物性研究所が新しい放射光リングの建設を計画しており、リングが建設された暁には光電子分光・磁気光学などの放射光利用研究を推進することを目指していた。残念ながら多くの関係者の多大な努力にもかかわらず放射光リングは実現せず、再び理学系に戻って来ることになったが、新しい研究科を立ち上げる時のさまざまな苦しみや喜びを味わったことは二度とできない経験だった。

柏の放射光が実現しなかったことを除けば、上述の通り学生時代も含めて30年以上になる東大在籍期間とつくばの10年間、幸運に恵まれてきた。そして何よりもこの間、優秀な学生たち、お世話になった教職員の方々に出会えたことが最大の幸運であった。ここに改めて感謝いたします。



藤森 淳
(物理学専攻教授)

光電子分光の伝道師、藤森淳先生

高木 英典 (物理学専攻教授)

1986年、銅酸化物高温超伝導体が発見されました。発見直後の歴史的な物理学学会のシンポジウムで、光電子分光のデータから電子間のクーロン相互作用（電子相関）の重要性をいち早く指摘したのが藤森淳先生でした。正直に言うと、その場にいた私には先生の指摘が先鋭的すぎて全く理解できず、後の自分の研究の方向に大きな影響を与えとは思いませんでした。一年後の1988年に無機材質研究所（現物質材料機構）から物理学教室に移られた先生は、30年の長きにわたり、研究室に集う俊英たちと共に、光電子分光を華麗に駆使して、高温超伝導体を含む遷移金属酸化物の電子構造に現れる相関効果を次々と明らかにしていきました。これに触発され相関電子物理の一大分野が出現しました。先生の30年間は放射光

科学とその恩恵を受ける光電子分光が飛躍的な技術的進歩を遂げたのと軌を一にします。先生は新しい電子分光技術の寵児でもあります。

先生は温厚な性格で知られ、声を荒げるのをだれも見ることがありません。ボソッとした語り口で、当たり前のように凄いサイエンスを話され、聴衆を驚かすのが先生の真骨頂です。御外見は30年前と驚くほど変わらず、万年青年の趣を漂わせておられます。その秘密を伺いましたが、微笑まれるばかりでした。御卒業後は光電子分光の伝道師としての活躍の場を国内外のさまざまな機関に上げられると伺っております。われわれを導いてくださったことに感謝するとともに、ますますのご活躍、発展をお祈りしております。

理学の森に守られて



朴 民根
(生物科学専攻 准教授)

1990年着任して、いつの間にか30年近くの年月が過ぎてしまいました。私の日本での生活は、文科省奨学金(研究留学生)を得て群馬大学内分泌研究所(現在:生体調節研究所)での研究生から始まり、その後、医学系研究科の博士課程学生になりました。野生動物農園をもつという子供の時から夢の実現に必要な知識を得るためには生殖内分泌系の専門知識が必要だと思ったからです。学位取得後の米国国立衛生研究所での研究生生活の後、再び内分泌研究所での研究を続けることになりました。このように農学と医学の背景をもつ私が、東京大学では理学という分野で研究を続けられるようになりました。

理学系で研究ができることは、私にとっては大きな意味をもっていました。今まで強く意識せざるをえなかった実用的な研究から、自分が本当に知りたいと思う事柄への研究へと向かうことができたのです。子供の時から野生動物、とくに爬虫類に興味をもっていた私は、学部や大学院では度々爬虫類を研究対象としていました。しかし得られた結果は時々他の脊椎動物とは大きく異なることもあり、このような現象についても研究ができる喜びを感じました。

このような背景もあり、東京大学に着任してか

らは、以前からの研究テーマである「生殖内分泌情報伝達系」のほかに、「爬虫類の生殖とエネルギー代謝制御系」も加えました。これらの研究展開には、共に勉強してきました大学院生と学部特別実習生たちが大きな力となりました。私がどれくらい指導教員として手助けになったか自信はありませんが、優秀で勤勉な彼らの日々の努力に支えられて私の研究生生活は幸せそのものであり、心より感謝いたします。また爬虫類(殆どトカゲ類)を用いた研究では、トカゲ愛好家の方々から飼育に必要なさまざまな情報をいただきました。大学生の頃、日本の愛好家たちが書いた野生動物の飼育書を読みたくて始めた日本語の勉強がきっかけで来日することができた私にとっては、何か運命的なものも感じます。

最後になりますが、所属する専攻と研究室のスタッフの皆様からもさまざまな場面で助けていただきました。また、在任期間中は定年最後の年まで、さまざまな委員会での貴重な経験もさせていただきました。支えてくださった先生方、事務職員の方々にも感謝いたします。このように理学の森に守られながら今日まで過ごしてきた私ですが、これからもずっと好奇心をもち続けながらの日々を楽しみたいと思います。

朴さん、野生生物との生活を楽しんでください

岡 良隆 (生物科学専攻 教授)

朴さん(と気楽に呼ばせてもらいます)は、韓国で農学修士取得後に、群馬大学医学部内分泌研究所で医学博士を取得されました。この時朴さんは生殖腺刺激ホルモン放出ホルモン GnRH に対する優れたモノクローン抗体 LRH13 をつくり、今でも多くの研究者がその恩恵を被っています。その後米国 NIH (National Institutes of Health) 留学を経て、1990年に理学部動物学教室第3講座の助手に着任、比較内分泌学の分野に分子生物学の技術や考え方をいち早く導入し、その後の研究室の活動にも大きく貢献されました。私は朴さんの着任前に脳内 GnRH ニューロンの研究を開始し、LRH13 を用いた研究で論文をちょうど1990年に発表したところでした。そういう縁もあり、低脳研という研究活動も共にし、私が1995年から8

年間臨海実験所に勤務した時期を除いて、私は今日までの長い年月を朴さんの同僚として過ごし、公私共に親しく接することができました。2003年に私が当研究室に教授として着任したときに、朴さんとも相談し、内分泌学と神経生物学を融合した「生体情報学」研究室という新たな名称の研究室として再出発し、今日まで、それぞれ独立に学生を指導しつつ、研究室内ではセミナーや飲み会を通じて、サイエンスだけでなくさまざまな話をして、楽しく研究室を共同運営することができました。朴さんは私より一足先に退職されますが、今後はもっとも愛する野生動物や植物とじっくりと語り合う、楽しい生活をされることと思います。また楽しくお酒を飲みましょう。

大きなゆらぎとともに

ついに退職の時が来て、感慨にひたる余裕もなく後片付けに翻弄されています。それでもいろいろ古い資料が出てくると懐かしく、ずっとほったらかしにしていたにもかかわらず捨てるに忍びなく葛藤中です。思い起こせば、本郷キャンパスには学部3年からお世話になっています。助手まで本専攻で過ごし、その後京都大学教養部、そこで新しく設置された人間環境学研究科に関わりました（相互作用基礎論）。そこではハイデッガー、漢字の成り立ち、ヨーグルトの効用などいろいろな分野の先生と親しくしていただきました。そして大阪大学理学部宇宙地球科学専攻の設置（理論物質学）にも関わり、宇宙理論や地球物理の研究に触れることができました。新しい建物がやっとできたとき本学工学系研究科（物理工学専攻）に移動することになり、若干不安でしたが十倉、五神、永長先生をはじめ皆様の絶大な支援のもとで楽しく過ごしました。ちょうどそのころ、量子相センターができました。その後、縁あってのもの本専攻に戻りました。このゆらぎ多き経歴はいわゆる流動化の観点からは典型例となるかもしれませんが、一緒についてきてくれた学生さん達、家族にはたいへん迷惑をかけたと心配しています。

研究に関しては、五月祭でのテーマに触発され「ゆらぎ」という言葉に魅力を感じて、大学院は統

計力学の研究室に進学しました。卒留文集の名前が「ゆらぎ」であったのは奇遇でした。修士論文は指導教官の鈴木増雄先生の海外出張に伴いカナダで書くことになりました。そこでは、ゆらぎの大きな2次元系の模型や3状態 Potts 模型などを研究しました。また、鈴木先生が提案された量子モンテカルロ法の立ち上げも行いました。そのため、モンテカルロ法がその後の主要な研究方法となりました。博士論文は「長距離秩序を伴わない相転移」でした。その後、熱ゆらぎのかわりに量子ゆらぎが重要な役割をする量子ダイナミクス、系の縮重度（エントロピー）が重要な役割をするスピントロスオーバー系、さらに最近では、マクロなスケールのゆらぎが重要な役割をする永久磁石の保磁力の研究も進めています。どれもまだ中途半端な状況で心苦しいところですが、今度もなんとか興味を維持して進めたいと思っています。

これまでこのような多様な部署での研究機会に恵まれ、また多様な研究対象に触れられたのは、いろいろな皆様からのお声がけの賜と感謝しています。この機会に皆様に心から感謝の意を表し、理学系研究科はじめ東京大学のますますの発展をお祈りいたします。また、いろいろわがままなお願いをしても丁寧・親切につきあってくれた職員の皆様にも心からお礼申し上げます。



宮下 精二
(物理学専攻教授)

宮下先生送辞

小形 正男 (物理学専攻教授)

宮下先生を見ていると、いつもパワフルでハートフルだと感心します。研究室の学生さん達はもとより、学部学生や事務の方々、さらにわれわれ同僚に対しても、いつも全力で心のこもった対応をしてくださいました。

宮下先生は1981年に本学物理学専攻で理学博士の学位をとられ、同年物理学科助手になられました。その後、京都大学、大阪大学、東京大学工学系研究科を経て2004年に理学系研究科教授として戻られました。この間、東大の久保亮五先生の統計力学研究の本流を受け継ぎ、相転移、量子モンテカルロ法の開発、量子ゆらぎの理論、さらに現在のトポロジカル物質につながるスピン系の研究など、統計力学の幅広い範囲の研究を続けてこられました。

ご経歴から分かりますように、東京・京都・大阪と大学間の学術の流動性を体現されています。どこへ行かれても頼りにされるため、工学系の物理工学専攻と本・物理学専攻の両方の専攻長をされました。さらにフランスの研究者との親交も深く、ヴェルサイユ大学の名誉教授にもなられています。

私が大学院に入ったとき宮下先生は隣の研究室の助手でしたが、軽井沢の合宿や研究室スキーなどでたいへんお世話になりました。宮下先生がドイツ・ハノーバーに滞在していた折には、無理やり押しかけて行ったにもかかわらず長時間相手をしていただき、生き方を伝授していただきました。ありがとうございます。そのときから先生のパワーとご厚情をいつも感じています。今後も、強力なパワーを持続していかれると思いますので、ぜひ引き続きご活躍ください。



高木 利久
(生物科学専攻教授)

高木利久先生のご指導を受けて 岩崎 渉 (生物科学専攻 准教授)

高木利久先生は、今では想像することも難しいですが「バイオインフォマティクス」という言葉がほとんど存在すらしなかった1980年代から、いわば日本のこの分野の「親」として本当に大きな役割を果たされてきました。

高木先生は1976年に本学工学部計数工学科を卒業され、その後すぐに九州大学の助手に採用されました。情報科学分野において先駆的な研究をされるいっぽうでゲノムデータベースの開発にも携わり、設立されたばかりの本学医科学研究所ヒトゲノム解析センターに移られ、1994年に教授に昇任されました。2003年には本学大学院新領域創成科学研究科情報生命科学専攻の設立を主導し、同教授に。並行して理学部では、2001年から学部教育特別プログラムを推進し、2007年の生物情報

科学科の新設に尽力されました。同年、やはり設立を主導されたライフサイエンス統合データベースセンターのセンター長に就任。2014年に生物科学専攻の教授に移られるとともに、JSTバイオサイエンスデータベースセンターのセンター長を務められています。この間、科研費特定領域研究の代表なども多数務められてきました。

時代の劇的な変化の中で分野を大きく育ててこられた高木先生からは、とても多くのことを学ばせていただきました。研究という営みに対する俯瞰的かつ長期的な視点、大局観。データとは、そして知識とは何か。退職後も忙しい日々が続くかと思いますが、ご健康に留意いただき、また学問の話をついじくりと伺えることを楽しみにしています。



戸張 勝之
(事務部長)

縁(えにし)の糸

東京大学に異動し、経理部契約課に配属されたのは、1990年(平成2年)4月である。

折しも、平成の時代も2019年の4月をもって終わることを思うと、東京大学での生業(なりわい)は、平成という1つの時代を駆け抜けたこととなる。

経理部(現在は財務部)を起点として、大型計算機センター(現在は情報基盤センター)、物性研究所、地震研究所、医学部、理学部、そして途中には東京海洋大学へ出向と、いろいろな部局等を経験してきた。

その間で、「ほっとした」という意味で印象深い出来事としては2つほどある。1つ目は、物性研究所での柏移転事業。当時は、バブルが崩壊したあとで、六本木キャンパスから柏への移転・設備経費がままならず、本部からの指示で数多くの

資料を作成した。結局、1998年(平成10年)の大型補正予算により、なんとか移転の目処がついてほっとした。2つ目は、物性研究所から経理部主計課に異動した後に岐阜県の神岡鉱山内にあるスーパーカミオカンデ検出器の主要部分である光電子増倍管の爆発事故。1万3千個余りの光電子増倍管のうち、7千個あまりが粉々に破損した。相当額の損害が生じ、その復旧にあたり、文科省へ日夜資料を持参し、何とか普及に目処がたってほっとした。

いずれも、ある意味、理学に関連する出来事と思うと何かしらの縁を感じる。

最終部局である理学部は、私事であるが父が在籍したこともあり、大学業務の集大成として挑み「ほっとしたい」という心境である。

このほかにも理学系研究科からは、名川文清(生物科学専攻 講師)さんが大学を去られます。長い間大変お世話になりましたことありがとうございました。—広報誌編集委員会—